

被爆体験、後世に残す

ヒロシマ講座 女子高生ら報告

強い思いで署名、証言収録

とちぎ
戦後70年
広島から
広島市の被爆の実態や核兵器廃絶に向けた取り組み

なごを学ぶ国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」2日目の29日、会場の広島国際会議場で、広島女学院高の生徒たちが核兵器廃絶を訴える署名キャンペーンや被爆体験の証言収録など



被爆について後世に伝えることへの思いを語る石原さん(左)と並川さん=29日午後、広島市内

の活動を報告した。「私たちは被爆者から話を聴くことができる最後の世代と言われている。後世に残す責任がある」と強調した。報告したのは同校3年の石原香音さん(17)と同校

2年の並川桃夏さん(16)。同校の署名実行委員会に所属し、さまざまな平和活動に取り組み。その柱の一つが、2008年に広島市で開催された中高生平和サミットを契機に始まった「核廃絶!ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」で、昨年度は6万2177筆が集まったという。

インターネットを通して世界中に被爆者の体験や思いを発信するプロジェクト「ヒロシマ・アークライブ」にも携わり、証言を収録している。並川さんは「戦後70年、被爆者の高齢化は深刻な問題になっている」と指摘。収録予定だった被爆者が直前に亡くなった経験から「少しでも早く、多くの方に話を聴きたいと思うようになった」と述べた。

2人は4〜5月、外務省

の「ユース非核特使」としてニューヨークに派遣され、核拡散防止条約(NPT)再検討会議の傍聴や現地の学生との交流などを通じて、核兵器廃絶を訴えた。

同会議では、世界の指導者に広島、長崎訪問を求め、日本の提案が中国の反対で実現しなかった。しかし石原さんは派遣を通じて「さまざまな出会いがあり核兵器廃絶の可能性を感じた」という。「会議の結果を」残念がる声もあるが、新たな一歩を踏み出すきっかけになれば」と願った。

(横松敏史)